

秋から冬に向かう 重量野菜の動向

秋から冬にかけてのこの時期は、野菜の分野でいえば、とりわけ生育期間がかかる重量野菜、大型野菜の生産・流通の見通しを検討しておくことが求められる。今年の夏は、大型野菜を中心に入荷が少なく、夏場にはここ数年来では珍しく相場が高騰した。それが9月の下旬には平年並みに緩和した。ただし、

10月から11月中旬にかけての秋から冬に向かう時期、16年は野菜平均単価で340円と大暴騰したが、翌17年は生産・出荷量が増えて単価180円と暴落した（過去5年の平均単価240円）。今年は9月下旬以降は16年と17年の中間程度で推移してきたが、さあどうなるのか。

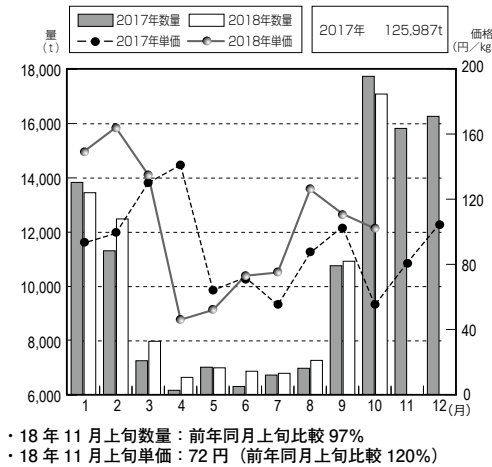
ハクサイ

【概要】
家庭用は鍋用野菜に特化。寒干し提案もしてみても

東京市場におけるハクサイは、年明けには入荷少なく高騰していたが、夏場には入荷数量も減らず、例年通り60〜70円の推移。9月には入荷が増え始め安くなるはずだが、今年は8月に茨城産の残荷が少なくほとんど長野産の独壇場だったため、8月は前月より6割も高く126円、9月10月の入荷量は前年並みに戻ったが、100円を切らない高値推移が続いた。11月上旬には72円まで下げたが、年末に向けては強含みか。

【今後の対応】
これからのシーズンは茨城産が中心で、寒さも強まり貯蔵性も出てくるため、産地としては100円を切らない相場調整をしたいはずだ。しかし17年は、即売産地である長野産が11月にも前年の2倍も出荷されていたため相場の足を引っ張った。今年の冬は、数量は問題ないが、高値推移傾向が続きそう。昨年には長野、群馬などが霜降りハクサイなどと寒締めをウリにしていた。一般家庭でも寒い時期の寒干しを提案してみてもどうか。

【背景】
冬の大型・重量野菜、というより重要野菜ともいえるのがハクサイである。キムチとして年間通して購入している人も、冬には家庭での鍋の具として間違いなく購入し消費する。30〜40年前までは一般家庭でも生で購入し自家製漬物として利用されていたハクサイは、いまや鍋用野菜に特化してきた。高くても安くてもその都度、必要量を購入するだけの品目になっており、消費の弾力性は低い。そのため入荷の増減が相場に敏感に反映される傾向が強い。

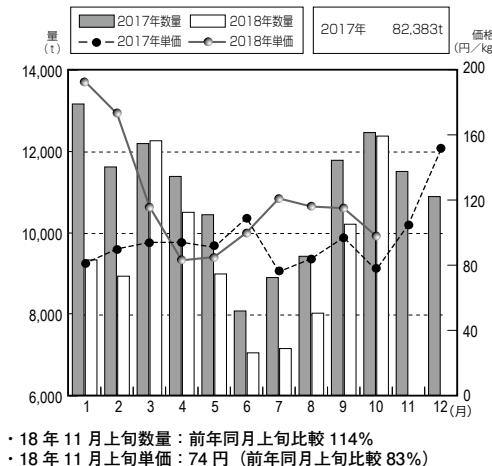


ダイコン

【概要】
9月まで高値基調推移。冬の需要期目指す作型増える

東京市場のダイコンは、今年10月からは年明けから入荷減の単価高が続く。春に一時安値があったが、不需要期の夏場にもやや入荷減程度でも100円を切らない相場が続いた。ようやく10月になってやや高値ながらも平年並みに戻った後、11月に入ると、青森の抑制型も多い上に関東産地も増えて単価は落ちている。10月の価格が夏場以降の高値に引っ張られるように、前年の3割高だったために、各産地も出荷前倒しの傾向にある。

【背景】
秋から冬にかけて、最近とくにダイコンが人気である。秋のサンマ漁の豊凶が話題になることが多い昨今、付随してダイコンおろしにも必需感が出てきた。なんとといっても、コンビニでの扱いがきっかけで、おでんとくにダイコン人気が沸騰気味だ。本来なら11月には干葉、神奈川県など関東産地に切り替わるが、昨年11月には青森産がその前年の3・4倍もの出荷増だった。夏秋期の残量ではなく、明らかにダイコン本番の冬季を狙った抑制の作型だ。



【今後の対応】
この冬に向けて関東産地はやや暖冬気味を予想されているものの、適度の雨量もあり日照も戻りつつある。今後は、雪が遅れている青森からの残量出荷もあり、安値傾向はあるものの数量は問題なく推移するだろう。ダイコンは地域内では、地場野菜として注目されつつあり、小売店頭では用途別のメニュー提案が再度必要になっている。煮上がり早く柔らかい現在の青首系の需要に、煮物用、薬味用、漬物用などのバラエティーを加えたい。

今年の市場相場を読む

主産地8割でも入荷先は46。冬場は干葉産中心に安定

ニンジン

【概況】

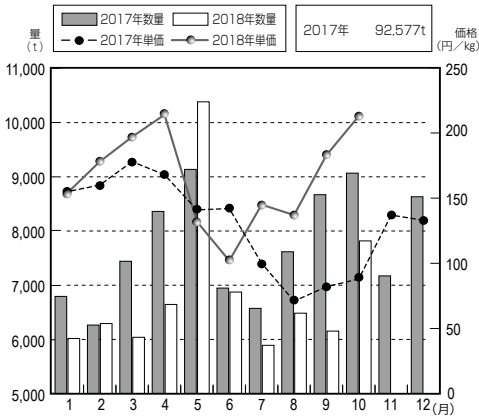
東京市場のニンジンは、過去10年ほぼ変わらない入荷数量である。ただし、月別や産地別でみると、入荷は安定していない。今年、春に徳島産などが入荷減で200円前後と高く、5月に干葉産の開始が早く出荷増で下げたものの、以降夏場には干葉産の切り上がりで北海道産も不足気味で相場は前年の2倍程度まで上げた。この品薄・高値傾向は需要期の10月にも変わらず、11月上旬には若干入荷増でも7割の高値だ。

【背景】

東京市場にニンジンを出荷する産地は、干葉、北海道、徳島で8割を占めるとはいえ、国内の39都道府県、輸入7カ国にものぼる。それだけ数量確保が必要な需要構造だともいえる。国内産の不安定感から、輸入量は生鮮用だけでもほぼ東京市場1年分と同量9万t近い。ちなみに輸入されているニンジンジュースは年間約4万t（生果換算7万t）。ニンジンの輸入量は少なくとも15万t前後。その国産化も重要だが、国内向けの生産増が先決だ。

【今後の対応】

これから冬に向け主産地は干葉であるが、生育期に雨量不足で肥大が遅れて相場高を招いた。10月には降雨に加えて温度も高く生育環境も緩和。雪が遅れている青森からの出荷も続くことから、今後さらに需要期になっていくが回りは潤沢だろう。ニンジンの消費拡大については、夏場にも需要が高い、沖縄の郷土料理ともいえる「ニンジンしゅりしゅり」（ニンジン千切りとツナを炒めて卵とじる）の普及が、ニガワリの2匹目のドジョウだ。



・18年11月上旬数量：前年同月上旬比較104%
 ・18年11月上旬単価：220円（前年同月上旬比較167%）

キャベツ

冬は関東産地主体で安定。入荷量は10年で15%増

【概況】

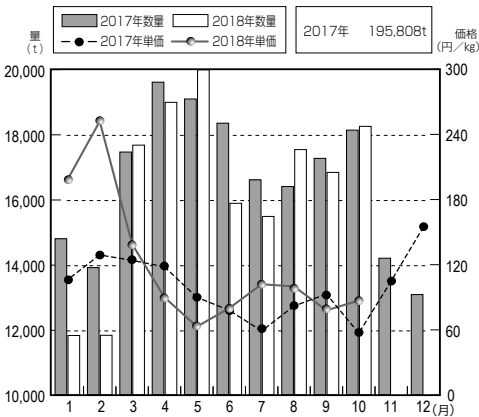
東京市場のキャベツの動向は、南関東の日照不足で6月下旬に主産地干葉が大幅減、それを群馬産の前倒しや長野産の緊急入荷でカバー。7月の主産地群馬は平年並みながら補完産地であるはずの東北産が遅れて単価は7割も高騰した。8月に入ると徐々に増え始めて9月、10月は100円を割った。では11月以降はどうか。茨城産が若干遅れており干葉産がその分を補って増入荷だが、冬は関東産に限定され不安要因はない。

【背景】

いまや野菜類は年間を通じてタイミングよく産地リレーされているが、キャベツの場合は前述のように、主産地の増減を補完産地がすかさず対応している。それだけ中心的で重要な食材であることを意味するが、近年、とくにそんな産地調整が頻繁に起きてきているのは天候異変が異常に増えているからだ。8月にも推移をみたが、その際も季節のレタスや果菜類が入荷減・単価高でも、使い勝手のいいキャベツには、やや高でも需要が強かった。

【今後の対応】

まさか今年、とくに孺恋キャベツのラジオ宣伝が多かったことと関係はなさそうだが、キャベツへの支持が高くなっていることは確かだ。東京市場の入荷量は10年前から15%前後増えているし、単価（17年98円）も強含みで推移している。万能食材として家庭需要が強いために小売店がカット販売で対応していることや、需要が加速度的に増えている加工業者の当用買いが増えたという要素もありそう。市場入荷量断然第1位という不動の地位ゆえか。



・18年11月上旬数量：前年同月上旬比較105%
 ・18年11月上旬単価：103円（前年同月上旬比較107%）

流通ジャーナリスト

小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙「新感性」月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」「レポート青果物の市場外流通」「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。